



特定非営利活動法人

IHC ヒマラヤ保全協会

第 17 回 山岳エコロジースクール報告書

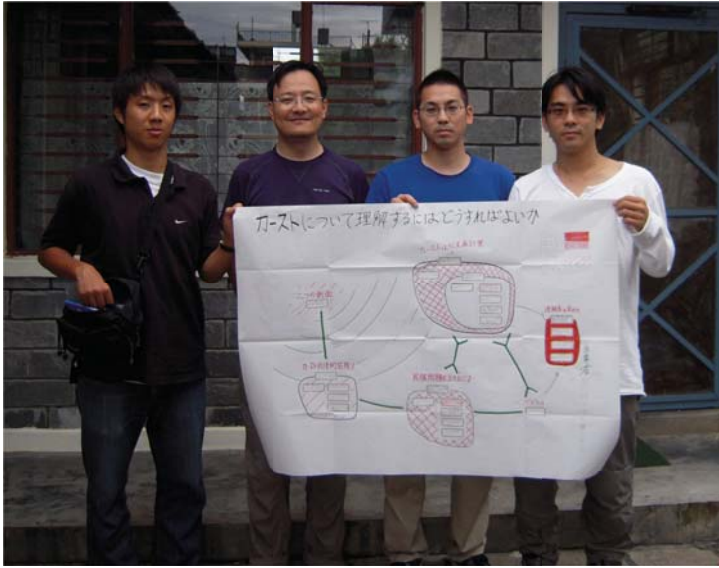
～ 参画型アプローチ（現地研修会）～

テーマ「カーストを理解するにはどうすればよいか」

目 次

はじめに	3
I. ステップ 1「テーマ設定」	5
① カードづくり	5
② 図解化	5
③ 多段ピックアップ	5
II. ステップ 2「グループ・ディスカッション」	6
① 元カードづくり	6
② 探検ネット（討論と図解化）	6
③ 多段ピックアップ	7
III. ステップ 3「合意形成」	8
① カードづくり	8
② KJ 法 1 ラウンド	8
(1) 伝染病などをふせぎ衛生状態を確保するために隔離する	9
(2) ネパールでは民族問題とカースト制度とが混在している	10
(3) カーストは法的には否定されたが、実際には今でも存在する	10
(4) 複雑多岐な問題であり軽率に口出しすべきではない	10
③ 衆目評価	10
IV. ステップ 4「フィールドワーク」	11
(1) カーストと職業との関係は意外に不明確である	12
(2) カーストによる差別はなくなっている	13
(3) 昔ながらの生活をしている	14
(4) カーストあるいは民族の識別をする	15
(5) コミュニケーションを大切にしている	15
(6) 日本に興味をもつ	16
(7) 森林保全プロジェクトがすすむ	16
V. ステップ 5「構想計画」	17
(1) 差別をなくす	17
(2) 今回の経験を今後にかす	17
(3) 現地の人々とともにあゆむ	17
VI. 参加者の感想	19
混沌からの一歩	19
必需品とは何だろう？	21
ネパールに行ってよかった	22
VII. 写真	24

はじめに



ステップ3「合意形成」の図解を手にする参加者たち

2009年8月29日から9月8日にかけて、第17回山岳エコロジースクール〔現地研修会〕を開催しました。山岳エコロジースクールは、ヒマラヤ保全協会のイベント（プロジェクトをのぞく）の中ではもっとも大きな成果があがっている行事です。今回は初めて、従来のパッケージツアーという形式ではなく、ネパール現地集合・現地解散という形で開催しました。近年、発展途上国を旅行する人がとても増え、多くの人々が日本から引率しなくてもネパールまで自力で来られるようになってきています。このようなあたらしい時代の流れを踏まえ、また

費用や日程の面でも効率的で柔軟に対処できる、現地集合・現地解散形式のスクールを今後とも増やしていきたいとおもっています。

今回の参加者は3名と少なめでしたが、その分 中身のこい研修会にすることができました。テーマは「カーストを理解するにはどうすればよいか」であり、国際協力プロジェクトをすすめていくうえで避けては通れない重要な課題でした。事前研修会・現地研修会・事後研修会を通して、「参画型アプローチ」のステップ1「テーマ設定」からステップ5「構想計画」までを実習し、その結果、カーストを理解するためのポイントとして次の結論が得られました。

1. 「カースト＝身分制度」とかんがえている人が多いですが、それは誤解です。
2. カーストの背景には衛生状態の悪さと隔離があります。
3. ネパールでは、カースト制度と民族構成とが混在しているため、カーストは複雑多岐な問題となっており一筋縄では理解できません。
4. 経済格差・教育格差など、カーストに代わるあらたな差別が生まれつつあります。
5. 私たちは、国際協力の現実的具体的な実践を通して、現地の人々とともに歩みながら問題を解決していきます。

ヒマラヤ保全協会は2005年から、今回訪問したサリジャ村で、生活林プロジェクトとして、植林事業・森林保全事業・織物事業・紙漉事業をおこなっています。サリジャ村の皆さんは、とてもあたたかく私たちを受け入れてくださり、またフィールドワークに全面的に協力してくださいました。ここに明記してふかく感謝の意を表します。

なお、日程は次表の通りでした。

	日付	曜日	プログラム	食事	宿泊先
1	8月29日	土	ネパール・カトマンドウ、Fuji Hotel 集合(15:00)、オリエンテーション		Fuji Hotel
2	8月30日	日	カトマンドウ → ポカラ(バスにて移動)、現地研修会	○	Pun Hill Guest House
3	8月31日	月	現地研修会	○	Pun Hill Guest House
4	9月1日	火	ポカラ → ペニ(車にて移動)、現地研修会	○ ○ ○	Yeti Hotel
5	9月2日	水	ペニ → サリジャ(徒歩にて移動)、ホストファミリーの家へ	○ ○ ○	Homestay
6	9月3日	木	学校訪問、苗畑見学、植樹	○ ○ ○	Homestay
7	9月4日	金	織物施設見学、紙漉施設見学、村人とのミーティング	○ ○ ○	Homestay
8	9月5日	土	サリジャ → ポカラ(徒歩、車にて移動)	○ ○	Pun Hill Guest House
9	9月6日	日	現地研修会	○	Pun Hill Guest House
10	9月7日	月	ポカラ → カトマンドウ(バスにて移動)	○	Fuji Hotel
11	9月8日	火	朝食後、Fuji Hotel にて解散	○	

I. ステップ1「テーマ設定」

2009年8月8日、ヒマラヤ保全協会事務所にて、事前研修会としてステップ1「テーマ設定」を実習しました。そのすすめ方（技法）は次の通りでした。

参画型アプローチの第1ステップは「テーマ設定」であり、問題解決をすすめるためにはテーマをまず明確にしておく必要があります。

「テーマ設定」で第一に重要なことは、パイオニア精神をもち、やりがいのあるテーマを選択することです。社会的に価値のあるよくできたアウトプットを出すことを目標に、問題を解決することを念頭においたテーマを設定します。このために具体的には、「○○○するにはどうすればよいか」といった設定の仕方（語尾）にするとよいです。

また、テーマを設定するときには自発性と切実性の両面に注目することが大切です。まず自分たちは何をやりたいのか、どうしたいのかをよくかんがえ、次に、直面する問題は何か、現場のニーズは何か、よく考察することです。

テーマは、中核メンバーによる原案がすでにある場合は、まずそれを提案してもよいです。あるいは、とりあえずの仮のテーマでもよいです。

具体的なすすめ方は以下の通りです。

① カードづくり

参加者各自が、1枚のカードに1項目ずつ約3枚のカードに取り組みたいテーマを記入します。問題解決あるいは解決策立案を意識して、語尾は「○○○するにはどうすればよいか」とします。1枚のカードには1つのメッセージを記入、一文につづることがポイントです。記入にあたっては相談する必要はありません。

② 図解化

次に、模造紙をひろげ、中心に「テーマ設定」と記入し、中心から周辺へ放射状に各カードを配置していきます。似ているカードはそばにおき、似ているカード同士を次々につなげていきます。カードとカードの間にはクリップをおきます。すべてのカードがでそろったら、カードを模造紙にはりつけ、クリップのところにはボールペンで線をひきます。

①→②を3回程度くりかえします。

③ 多段ピックアップ

次に、できあがった図解を各自がよく見て、ひろいたいテーマが書かれたカードの左上に☆印1個をつけます。次に、☆印がついたカードだけを読んで、さらにひろいたいカードにもう1個☆印をつけ、☆☆とします。さらに、☆☆がついたカードだけを読んで、さらにひろいたいカードにもう1個☆印をつけ、☆☆☆とします。テーマが1つにしばらくこまればそれに決定します。

しばらくこまれない場合は話し合いをし、テーマの表現を変えて合意をえるようにします。それでも決まらない場合は多数決で決めます。

今回のスクールでは、上記のプロセスをへて12件のテーマの候補から、「カーストを理解するにはどうすればよいか」がえらびだされました。国際協力プロジェクトをすすめるためには避けて通れない重要な課題です。

II. ステップ2「グループ・ディスカッション」

テーマ設定にひきつづきステップ2「グループ・ディスカッション」に入りました。8月8日にその途中までおこない、後日ネパールに入り、8月29日にカトマンドゥのフジホテル、8月30日にポカラのブンヒル・ゲストハウスにおいてそのつづきをおこないました。その具体的なすすめ方（技法）は〔①元カードづくり→②探検ネット（討論と図解化）→③多段ピックアップ〕となっていて、設定されたテーマを中心にしてチームで議論し情報や意見をだしあいました。



探検ネットを作成する

① 元カードづくり

まず、机のうえに模造紙をひろげ、ステップ1で設定したテーマを中心に書き、楕円でかこみます。チームの各自が、テーマにそって、素材となるデータや自分のかんがえをカードに記入します。1枚のカードに書かれた内容が、全体として1つの中心性をもってうったえかけるように、1枚のカードが1つの「志」（メッセージ）をもつように記します。カードに書かれる言葉は、言葉になる以前に各人の心の中に存在したそれぞれのメッセージを言語化したものです。最初は各自5枚ぐらいの元カードをつくります。

② 探検ネット（討論と図解化）

司会者を1人きめます。チームメンバーが自分のカードを順番に読みあげて司会者にわたします。司会者は、カードを模造紙上に、中心のテーマから周辺へむかって配置します。似ているカードはそばにおきます。カードとカードの間にはクリップをおきます。カードをおきおわたたら、グループ内で討論をします。自分の発言のポイントは簡単なメモ（点メモ）をしておきます。討論中はあくまでも討論に集中し、カードづくりはおこなわないようにします。そのかわり、簡単なメモ（点メモ）を各自がとっておき、後でカードづくりの時間をあらためてとって、そのときにカードづくりをおこないます。この討論法の特徴は特定の書記をおかず、自分の発言の記録を各自が自分でとるところにあります。過去の例ですと、たくさん発言したにもかかわらず何をしゃべったのかよくおもいだせない人がいましたので、メモをとっておくことは大切です。一方、発言できなかったことでも、後のカードづくりの場面で記してもよいです。

「空間配置→討論→カードづくり」を3～4回くりかえします。カードがでつくしたらカードを模造紙にはりつけます。クリップのところには線をひきます。似ているひとまとまりのカード群を輪取り（島取り）します。4注記「（1）時、（2）所、（3）情報源、（4）作成者」を記入します。

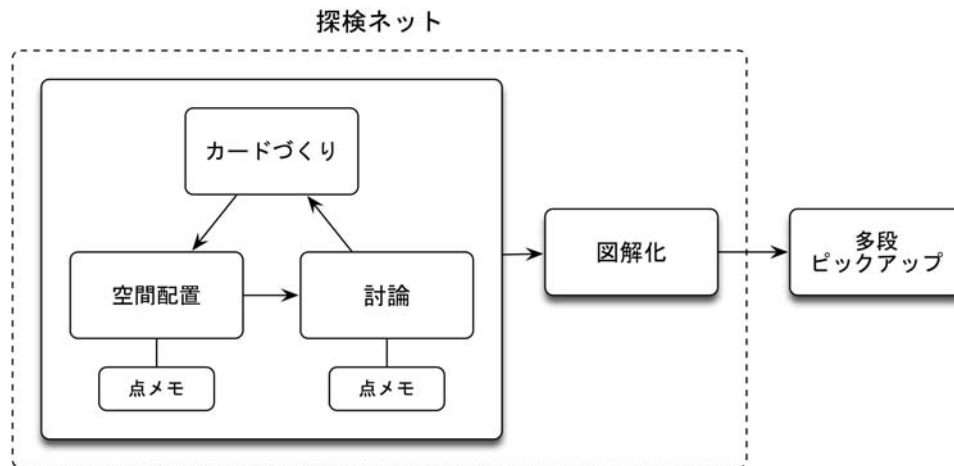


図1 探検ネットと多段ピックアップ

③ 多段ピックアップ

作成された図解（探検ネット）をよくみて、ひろいたいカードの左上に赤色☆印をつけます。ひろったカードの数をかぞえます。これが1段目のピックアップになります。1段目は多めにピックアップします。次に2段目のピックアップをおこないます。☆印のついたカードのみを読みかえし、さらにひろいたいとおもったカードについて、前の☆印の隣にもう1つ☆印をつけ☆☆とします。ひろったカードの数をかぞえます。次に3段目のピックアップをおこない、同様に☆☆☆とします。ひろったカードの数をかぞえます。こうして約20枚のカードをひろいあげます。

グループ・ディスカッションでは、オズボーン氏のブレインストーミングの精神が役立ちます。特にその4原則、（1）批判を禁ずる、（2）量をもとめる、（3）自由奔放、（4）結合、は有用です。（1）批判を禁ずるとは、他人の発言を批判したり否定してはならないということです。（2）量をもとめるとは、ひとつひとつ意見の質よりも、多種多様に数多いアイデアをだせということです。（3）自由奔放とは、ひかえめな気持ちではなく、奇想天外におもえることでもおもいついたことはすべてだすということです。（4）結合とは、他人の発言に接して、あるいはそれにつけくわえて意見をのべることであり、他人の発言に刺激されたり、他人の発言から連想をはたらかせることが重要です。グループで議論していると触発された様々なことをおもいだすことができます。

情報処理の観点からいうと、グループ・ディスカッションでは、過去に各人の心の中にインプットされた情報をつかって情報処理をおこなうことになります。上記のプロセスをへてそれらの情報が処理され、最終的には約20件のメッセージがアウトプットされてくることになります。

上記のプロセスの結果、最初に59枚のカードだされ、それらから次の17枚のカードがひろいあげられました。

1. カーストには階級の側面と職能集団の側面とがある。
2. 1990年の憲法改正でカーストは法的には存在しない。
3. ネパールのカースト制度は1854年に制定された旧ムルキアイン（旧国家法典）に基づく。
4. チェットリの人が下のカーストの人と結婚したら下のカーストに下がり、破門された。
5. 洋式便器に座ったらタムシが股にうつってしまった。

6. カーストのメリットはあるのか？
7. カースト制度と水は密接な関係にある。
8. カーストの背後には南アジアの気候風土、衛生状態の悪さ、伝染病がある。
9. カーストとけがれの概念は関係がある。
10. インドとネパールは違う。
11. カトマンドゥ盆地の都市国家が現ネパール国の基礎とネパール人のアイデンティティをつくりだした。
12. ネパールのカースト制度は3つのカーストを統合したものである（パルバテヒンドゥ、ネワール、マデシ）。
13. ネパールでは民族問題とカースト制度とが混在している。
14. カーストのデメリットは？
15. 誰がどこまで気にしているのか？
16. カーストについて外国人が口出しすべきか？
17. カーストの教育は誰が教えるのか？

III. ステップ3「合意形成」

2009年8月31日、ポカラのプンヒル・ゲストハウスにおいて、ステップ3「合意形成」を実習しました。その具体的なすすめ方は〔①カードづくり→②KJ法1ラウンド→③衆目評価〕です。

① カードづくり

グループ・ディスカッションによって最終的にえられたカード17枚をあたらしいカードに転記します。

② KJ法1ラウンド

「KJ法1ラウンド」の技法をつかって情報を処理します。具体的には、カードひろげ、カードあつめ、表札づくり、図解化、口頭発表（叙述化）の順にすすみます（図2）。

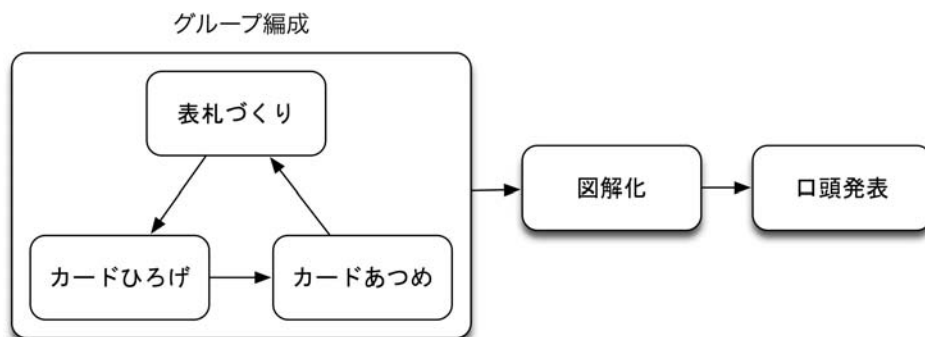


図2 KJ法1ラウンドのすすめ方

(1) カードひろげ

全員に元カードをくばります。

(2) カードあつめ

- (2-1) 親は、自分の元カードのどれか1枚（親札）をよみあげ、土俵の円の中心におきます。
- (2-2) 各人が手もちのカードをみて、志がちかいと感じるカードをつけ札として二重円の中（中心円の外側）におきます。すこし軽率気味にだした方がよいです。
- (2-3) 候補のカード（つけ札）がでそろったら、セットにできるくらい志がちかいカードは中心円の中へ、それほどではないカードは二重円の外へ移動します。
- (2-4) 「なぜならば・・・」といった理由づけはしない。相対的な志のちかさで、感性的にあつめます。
- (2-5) セットになったカードは「婚約組」にはいります。
- (2-6) 「婚約」にはならなかったつけ札のカードは、元のあずかり主のところにもどします。
- (2-7) セットがえられなかった親札は「独身組」にはいります。
- (2-8) 親の役は輪番で交代していきます。
- (2-9) すべてのカードが「婚約組」あるいは「独身組」にはいった時点で1段目のカードあつめは完了します。

(3) 表札づくり

- (3-1) 「婚約組」の各セットに表札をつけます。表札づくりは「核融合法」をつかいます。
- (3-2) 表札がついたらそのセットは「結婚組」に移動します。

「KJ法1ラウンド」は、人間がおこなう（人間が主体になった）情報処理の技法です。これは、コンピュータがおこなう定量的な情報処理に対して、数値化できない情報をあつかう定性的情報処理技術といってもよいです。情報処理とは、入力（インプット）→処理（プロセッシング）→出力（アウトプット）という三場面からなっていて、入力では情報を心の中に入れ、処理では心の中で情報を編集し、出力ではその結果を言語化して外部に発します。

「カードひろげ→カードあつめ→表札づくり」はこの情報処理の三場면을技術化したものです。「カードひろげ」では、グループ・ディスカッションの時の関係性を断ち切ってそれぞれのカードを分け散らして無秩序にならべて、あらためてそれぞれの情報を自分の心の中に入力（インプット）します。これは「分散入力」といえます。「カードあつめ」では、各カードを、時系列的な関係性（つながり）ではなく並列的に配置し、相対的な類似性（アナロジー）に注目して、似ている情報のセットをつくりだします。情報を並列的に処理（プロセッシング）するので「並列処理」とよべます。「表札づくり」では、できあがった情報のセット（情報群）を言語をつかって一本に統合して出力（アウトプット）します。これは「統合出力」といえます。このように「カードひろげ→カードあつめ→表札づくり」の情報処理技術の三場面は「分散入力→並列処理→統合出力」であるとその特徴を要約することができます。

作成された「KJ法図解」を文章化すると次のようになります。

(1) 伝染病などをふせぎ衛生状態を確保するために隔離する

カーストには、職能集団の側面と階級制度という二つの側面があります。

そもそもカーストの背後には、南アジアの気候風土や衛生状態の悪さ、伝染病などがあり、病気がひろがったときに特定の人々の隔離あるいはカーストが発達したといわれています。南アジアは高温多湿で衛生状態が元々わるい地域であり、実際、接触によって病気がうつることがあります。たとえば、この地域に本来は存在しなかった洋式便座にすわったら、皮膚病（タムシ？）が股にうつってしまったという例もあります。

カースト制度が水やけがれの概念と密接な関係しながら発達したのはこのような理由があったためでしょう。

したがって、この地域には接触を高度にきらう習慣があり、隔離も接触をふせぐためのひとつの方法として採用されたようです。こうして隔離が必要になり、現実的には職業ごとに隔離され、また隔離されたグループは特定の職業に代々つづけて従事するという結果が生まれたのではないのでしょうか。伝染病などの拡散をふせぎ衛生状態を確保するために、隔離にメリットをみとめざるをえなかったという事情があったといってもよいでしょう。

（２）ネパールでは民族問題とカースト制度とが混在している

ネパールのカースト制度は３つのグループ（パルバテヒンドゥ、ネワール、マデシ）を統合したようなものです。これはインドのカーストとはあきらかにちがいます。カトマンドゥ盆地のネワール都市国家が、ネパール人のアイデンティティや社会制度の中核をつくりだした名残が現在でも見られますが、一方で、カースト制度はカトマンドゥ盆地のチェトリが抑圧構造を正当化するためにつくったという過去があり、それが今日の民族問題の原因にもなっています。

このように、ネパールのカースト制度はインドのように慣習に基づくものではなく、ある特定の集団が人工的に制定したところにその問題を大きくした原因があります。ネパールでは、民族問題とカースト制度とが混在しているのであり、このいちじるしい複雑さが、カーストとその問題（デメリット）を理解するうえでとても大きな障害になっています。

（３）カーストは法的には否定されたが、実際には今でも存在する

ネパールのカースト制度は 1854 年に制定された旧ムルキアイン（旧国家法典）に基づきますが、1990 年の憲法改正でカーストは法的には存在しないことになっています。しかし、旧国家法典で破門される人がまだいます。また習慣的には、下位のカーストの人と結婚すると、上位のカーストの人は下位におりたり、上位のカーストからは破門されるということがあります。

現実的には、カーストは今でもしっかりと存在しています。

（４）複雑多岐な問題であり軽率に口出しすべきではない

カーストの問題はこのように複雑多岐であり、単なる階級の問題ではなく簡単に理解することはできません。外国人が軽率に口出しすべき問題ではなく、また国際協力の現場でも、誰がどこまで気にしているのか、また教育現場ではどのようにとりあつかわれているのかをまずしっかりおさえてから発言なり行動なりをおこしていくようにしなければなりません。

③ 衆目評価

「衆目評価法」をつかって、チームとして合意を形成すべきポイントをあきらかにします。「衆目評価法」はテーマをめぐる全体状況を踏まえているため信頼性は非常に高く、その結果にもとづいて対策を講じた場合、的中の度合いはたいへん高くなります。その具体的なすすめ方（技法）は次の通りです。

- （１）図解の発表・解説：担当者が作成された「KJ 法図解」の解説をします。
- （２）投票（通常 5 点法）：まず、一番重要だと思う島の符号を、投票用紙の 5 点の欄に記入します。次に、2 番目に重要だと思う島の符号を 4 点の欄に記入します。以下、3 番目に重要だと思う島の符号を 3 点の欄に、4 番目に重要だと思う島の符号を 2 点の欄に、5 番目に重要だと思う島の符号を 1 点の欄に記入します。
- （３）得点の集計：担当者が各島（符号）ごとに得点を集計します。

(4) 得点のランクづけ：各島の得点を5ランクに区分するために、次の式により得点幅（級間）を求めます。

級間＝〔最高得点÷5→小数点切り上げ〕 例）最高得点＝27の場合

級間＝〔27÷5＝5.4→小数点切り上げ〕

＝6

A～Eの5ランクに各島を階級区分した表をつくる。

（島の数がすくないときは4ランクにする。）

(5) 図解に色塗り：ランクに応じた赤色の濃淡の模様を「KJ法図解」の該当する島（の周囲に）に塗ります。

(6) 結果の発表：図解を示し、評価結果を発表します。

衆目評価によって得られた結論は次のようになりました。

カーストと民族が混在して複雑な問題を生みだしている

ネパールでは、カーストと民族構成とが混在しており、カーストの問題と民族問題とが複雑にからみあい、問題は多岐にわたっています。カーストの問題は単なる階級制度の問題ではないため簡単に理解することはできません。したがって、国際協力の現場において、外国人が軽率に口出しすべき問題ではなく、誰がどこまで気にしているのか、また教育現場ではどのようにとりあつかわれているのか具体的にまずしっかりおさえてから、現地にて住民と向き合い対話しながら、発言なり行動なりをおこしていくようにしなければなりません。

IV. ステップ4「フィールドワーク」

ステップ3「合意形成」の結果をふまえて、ステップ4「フィールドワーク」にすすみます。フィールドワークは、ヒマラヤ保全協会の事業地のひとつであるサリジャ村においておこない、日程は次の通りでした。

9月1日：ポカラからベニに移動

9月2日：ベニからサリジャ村に移動、道中フィールドワーク

9月3～4日：サリジャ村のフィールドワーク

9月5日：ベニからポカラへもどる

9月1日、ベニ到着後、フィールドワークのための調査項目を出しあいました。具体的には、ステップ3で作成した図解に各自がそれらを書き込むという方法をつかいました。フィールドワークはこれらの調査項目に基づいておこなわれました。それらは以下の通りです。

- ・1990年の憲法改正を境に明らかに変わった事はあるのか？

- ・住民の旧ムルキアインの知識について調べる。
- ・水や食物に関するカーストのルールを破ったら、どうなるか調べる。
- ・男女関係に関するカーストのルールを違反したらどうなるか調べる。
- ・清めの儀式の存在について調べる。
- ・親・兄弟の職業について調べる。
- ・転職の可能性について調べる。
- ・カーストの生活におけるメリットについて調べる。
- ・カーストの精神面におけるメリットについて調べる。
- ・ネパール人はインドのカーストを知っているか？
- ・病気になったらどうするのか調べる。
- ・病院の人はどのカーストに属するのか？
- ・学校でダリットはダリットの友達しかいないのか？いたら親は気にするか調べる。
- ・カースト内で伝染病がはやったらどうやってうつるのを防ぐのか？
- ・カーストのデメリットは何か？
- ・学術的研究は限られているので、現地事業をすすめながら具体的なやりとりの中で気がついたことを記録する。
- ・グローバル化・近代化と反比例しているのでは？
- ・他のカーストの人と食事したことがあるか調べる。
- ・カースト毎にトイレがあるか調べる。
- ・他のカーストの人の家にいったことがあるか調べる。
- ・外国人による人権運動についての感想を調査する。
- ・ダリットによる人権運動についての感想を調査する。
- ・カーストについてそもそも体系的に学んでいるのか？
- ・どのような方法で教えられるのか？
- ・学校では何を教えているのか？
- ・親の子に対する教育方法・時期について調査する。

フィールドワークの結果は「データカード」に各自が記載しました。ポカラにもどってから、9月6日、「検
索図解」を作成し、項目別にデータカードを整理しました。データカードの記載は以下の通りです。

(1) カーストと職業との関係は意外に不明確である

ネパールの森林組合にはカーストに関係なく誰でも参加できるようである。(K-1)

Pun 氏によると組合で重要決定をする総会では、ダリットの組合員も他の組合員と区別なく投票できる。
選挙と同じで、16歳以上で市民権を持っていれば誰でもよいそうである。カースト差別すると政府に罰せ
られるため、露骨な組織的差別はもうないとのこと。

(Date: 09/8/31 Source: Pun 事務局長 Place: IHC-N オフィス Recorder: M.K.)

カーストによる就職の制限は存在しないようである。(K-8)

カーストによる就職の制限はないことは1990年の憲法改正によるもの。バフンでもより良い収入を得るために職を選ばなくなっていることや、プログラマーのような新規の職業が次々にできてきていること。転職の制限もない。グローバル化、教育。

とはいえ、例えば財界はネワール族が支配しているように、以前の名残は今でも根強く存在しているとのこと。

(Date: 09/9/4 Source: サリジャ村住民 Place: サリジャ村 Recorder: M.K.)

カーストに関係なく誰でもゴルカ兵になれる。(M-1)

ナル バルド コルジャ プンさん(67) はインドでゴルカの兵隊として兵役に服していた。彼の父は小さな村で農夫として働いていた。彼の4人の息子達は家族を支える為にゴルカの兵隊として働いていた。そのおかげで彼はインド政府から年金を受ける事が出来た。彼は村では珍しく2階建ての家を持ち、かなりの数の家畜も所有していたので、彼は優雅な生活を送っている。

(Date: 09/9/4 Source: ナル バルド Place: サリジャ村 Recorder: M.M.)

カーストに関係なく出国は自由に出来るようである。(K-7)

出稼ぎで外国に行くネパール人は多いそうである。以前は英国やシンガポール、インド(軍)、今日では、マレーシアやアラブ各国の軍隊に入ることが多い。以前は低カースト出身者が多かったものの、最近バフン・チェトリも増えているとのこと。余談だがバフンは最近まで英国、シンガポール軍には入れなかったとのこと。出稼ぎ組はバフンが少数派だったことも、関係するのかわ、カースト差別もなく、仲が良いとのこと。

(Date: 09/9/4 Source: チトラ・プン Place: プラタップ宅 Recorder: M.K.)

サリジャ村においては、肉を扱うことに対する抵抗は無いようである。(K-6)

コルジャ家で鶏を祭壇に生贄として捧げる儀式を見ることができた。祭壇の前に鶏をつなぎ、家長が水を振りかけ、鶏が全身をブルブル震わせたら、屠るという儀式である。鶏が体を震わせた後に、鎌で首を半分切り、出てくる血をコップにため、血が出なくなった時点で首を切り落とした。生き血は長男の妻であるカルパナが飲んだ。子ができやすくなるようにとのこと。儀式の後の羽根をむしったり、肉を加工する作業は長男のソロスが行った。不浄カーストの人間が食肉処理をするものと思っていたが、父親のディルも別の肉を加工しているのを見たことがあるので、山岳部では屠殺も加工も自分達でするのが一般的なようである。

(Date: 09/9/4 Source: 該当なし Place: サリジャ村 コルジャ宅 Recorder: M.K.)

(2) カーストによる差別はなくなっている

ネパール人は穢れているはずの左手を普通に使っている。(M-2)

ネパールでは左手は汚い仕事をする時だけ使うと言う事を聞かされていたが、一般の人々の毎日の生活を見ていると、全く普通に使っている事に気が付いた。例えば、パンを裂く時には両手を使っている。それに握手、洗濯、料理、ミルク絞り、そして物を支える時にも左手を使っている。

(Date: 09/9/4 Source: 該当なし Place: サリジャ村 Recorder: M.M.)

カースト制度上重要な「ケガレ」の意識が希薄になってきているようである。(K-4)

右手による汚物処理、清めの儀式の省略、ダリットとの水のやりとり等を目撃した。衛生教育の普及=ケガレの正体の科学的解明、外食産業の発達も相俟って、急速にケガレに対する意識が薄れてきたようである。興味深かったのは道中、墓場や葬式場など死の影を感じさせるものが何もなかったこと。

(Date: 09/9/2 Source: 該当なし Place: ベニからサリジャに向かう道 Recorder: M.K.)

ダリット差別は、山村部においてはあまり無いようである。(K-10)

我々のポーターはダリットだったが、サリジャ村の住民は彼らと普通に会話したり、彼らにお茶をだしていた。最近ではダリットの教師が、高カースト出身の学生もいる学校で教えることもあり、その場合は他の教師達と一緒に寝泊まりしたり、食事をするそうである。ダリットと食事する、同じ家に寝泊まり、同じトイレを使うことに抵抗があるのは、もはや一部のバフンだけではないかとのこと。

(Date: 09/9/5 Source: チトラ・ブン Place: サリジャ村からの帰路 Recorder: M.K.)

サリジャ村の学校の教師の間では、カースト差別は無いようである。(K-5)

サリジャ高等学校の教師陣とミーティングをした。長いミーティングでは無かったが、それぞれの担当科目と出身地を聞くことができた。様々なカースト出身の教師が混じっているようである。ミーティング中のお互いとの接し方、行動、他者の発言中の態度等を観察したが差別らしき行動は特になかった。

(Date: 09/9/3 Source: 該当なし Place: Salija Higher Secondary School Recorder: M.K.)

ダリット差別は、地位に対する差別から、「ダリット的な考え」に対する差別に変化しているようである。(K-9)

ダリットは職に就くことが許されなかった時代には物乞いをして生きていた。

自力で稼ぐのではなく、他人からの施しで生活するという考え。

過去の被害者として、その償いを現在受ける権利を主張。

この考えは今でも根強く残っている。

この思想が差別の原因となる。

(Date: 09/9/5 Source: チトラ・ブン Place: サリジャ村からの帰路 Recorder: M.K.)

(3) 昔ながらの生活をしている

サリジャ村の人は電気が無くても普通に生活できる。(M-3)

電気が来ていないからと言って貧乏であるとは限らないが、ここサリジャでは例外のようだ。チトラさんによると電気がある事による利点は4つあると言われている。

1. ご飯を炊く時間が短時間ですむ。
2. テレビやインターネットを利用する事によって村以外の場所とより良いコミュニケーションを持つ事が出来る。
3. 冬の暖房やお湯を沸すことが出来る。
4. 電球により夜を有効に使える。

私はこれらの利点は必要以上にぜいたく品であると感じた。人々は太陽熱、油利用のランプそして懐中電灯を使っている。人々は過去数百年に渡って電気無しの生活を送ってきた。だから、新たに電気を利用する事によって新しい問題が出てくる様な気がする。

(Date: 09/9/3 Source: チトラ Place: サリジャ村 Recorder: M.K.)

サリジャ村ではゴミ箱を使う習慣があまり無い。(M-5)

サリジャ村で私が気が付いた 1 つの点は道路に多くのごみが放置されている事だ。何でも生産して、再利用して無駄にしない事は外部からの影響の結果だと思われる。

特に私の注意を引いたのは安くて便利で長持ちするインスタントうどんの包み紙だ。多くの子供たちがおやつとしてそれを食べた後、ポイと捨ててしまっている。

私はホストファミリーにお土産として箱入りのチョコレートを買って行ったが、そのチョコレートの箱が同じ様に捨てられてしまうのかなと考えさせられてしまった。

(Date: 09/9/3 Source: 該当なし Place: サリジャ村 Recorder: M.M.)

サリジャ村で蜂の幼虫を食べた。(H-3)

夜仲良くなった人に、蜂の幼虫捕りに誘われた。木の上にある蜂の巣を木に布を巻き、そこに特殊なオイルをぬり、火をつけた棒で燃やしていた。そして巣を落とし、中から蜂の幼虫をとり出してその場で食べた。味は煙っぽさとクリーミーでとてもおいしかった。

(Date: 09/9/3 Place: サリジャ村 Recorder: H.R.)

(4) カーストあるいは民族の識別をする

ネパールでは苗字よりカースト名を先に名乗る。(K-2)

アユッシュに家族構成や、日常的な慣習等について話す機会があった。自己紹介で苗字ではなく、「マガル族のアユッシュ」と言ったのが印象的だった。「マガル」という言葉が度々でてきたのに対して「コルジャ」は一度きり。日常生活では、カースト名である「ブン」を使っていることが、彼のメールアドレスから窺い知れた。カトマンドゥで出会った所謂高カーストの間人もカースト名を名刺に載せていたことから、こちらではそれが一般的なようである。

(Date: 09/9/2 Source: アユッシュ・コルジャ Place: コルジャ家 Recorder: M.K.)

ネパールの子どもは恥ずかしがり。(H-2)

小学校を訪問した時やサリジャ村道中、サカマニさんの子どもなど特に女の子がそうだったのだが、あいさつすると笑顔で逃げたり、隠れたりする。

(Date: 09/9/3/ Place: サリジャ村 Recorder: H.R.)

サリジャ村とバフン・チェットリの村では人々の顔つきが違う。(H-4)

距離にしたらずこまで遠くないが、2 つの村では顔つきが違う。バフン・チェットリの村はアーリア系の顔つきだが、サリジャ村（サリジャ地区上部地域）はモンゴロイド系の人が多かった。

(Date: 09/9/3 Place: サリジャ村 Recorder: H.R.)

(5) コミュニケーションを大切にしている

あいさつをすればちゃんと返してくれる。(H-1)

僕らが歩いているとすごくジロジロみてくる。怖いぐらいに。だがこっちがあいさつすると笑顔で返して

くれる。だから、冷たい目で僕らを見ているわけではないと思った。

(Date: 09/9/2 Place: トレッキング中 Recorder: H. R.)

売店の女性に握手を求めたら断られた。(H-5)

売店でちょっと話した 25 歳ぐらいの男性と 40 歳ぐらいの女性に最後握手を求めた。男性は普通に握手したが、女性は断り、手を合わせていた。

(Date: 09/9/5 Place: ポカラに向かう途中 Recorder: H. R.)

(6) 日本に興味をもつ

サリジャ村の若い人は日本に憧れている。(M-4)

日本人の私との出会いがどれほどネパールの若者達に影響があったか判らないが、彼等は日本について非常に興味を持った様だ。特に彼等はデジタルカメラや IPOD 等の電化製品について更なる興味を持った様だ。16 歳のモハンは日本で勉強して仕事についてみたいと言う希望を語ってくれた。彼等に日本についてどんな事を知ってるか聞いた時に、彼等がほとんど日本について知らないので、インターネットを利用する事によって彼等が日本について最新の情報を得る事が出来るのではないかと感じた。

(Date: 09/9/3 Source: モハン Place: サリジャ村 Recorder: M. M.)

(7) 森林保全プロジェクトがすすむ

IHC-N の苗畑では様々な苗が大切に育てられている。(K-3)

アロー (イラクサ) の苗は 7 ~ 8 ヶ月、ロクタを含むその他の苗は最低 1 年間は苗床で育ててから、植林地に植えかえられるそうである。生態系を壊さないように、ジャングルの構成植物を何種類も育てているそうである。村人がボランティアで国林に植える場合の苗は無償、個人の所有地に植えるものは有償。

(Date: 09/9/2 Source: IHC-N 職員 Place: IHC-N Nursery Recorder: M. K.)

「検索図解」作成後、フィールドワークの結果をふまえて、どのような仮説を立てることができるか、グループ・ディスカッションをしました。得られた仮説の要点をまとめると次のようになります。

カーストに代わる新たな差別が生まれつつある

私たち外国人の中には、ヒンドゥー教＝カースト制とおもっている人がいますが、これはあきらかな誤解です。文化は国によってちがうのですから、その国の文化については現地に実際に行って実態を理解するようにつとめ、また、外国人が現地社会に介入しすぎないようにしなければなりません。

マガール (族) の村では、バフン・チェットリの村にくらべてカースト制は弱いようです。1990 年の法改正により法的にも差別ができなくなったことも影響しているにちがいありません。また、グローバル化や科学的知識の浸透により「けがれ」の正体がわかったり、生活の利便性を追求するようになってきたので、伝統的な習慣はくずれてきているようです。一方で、低カーストの人々が海外に出稼ぎにいき経済力をつけて、地域社会の中で優位になってきている事実も見逃せません。将来、カーストは過去の文化になるのではないのでしょうか。

このように、伝統的なカーストは弱まってきているようですが、その代わり、経済格差や教育格差などが

生じてカーストにかわるあたらしい差別が生みだされてきています。差別の質が、先進国に見られるようなものになりつつあるといえます。

そこで、先進国における人権運動の歴史あるいは人類の歴史的な変遷を見て、そこからアナロジーをはたらかせて、ネパールにおける差別の今後の流れ、未来の予測をし、適切な対処法を見つけだすことが重要になってくるのではないかとおもいます。

V. ステップ5「構想計画」



KJ 法図解を作成する

ステップ4「フィールドワーク」終了後、私たちは帰国し、2009年10月17日にヒマラヤ保全協会事務所にてステップ5「構想計画」をおこないました。今後の目標を設定し、具体的にどのように行動すればよいのか、解決策を立案しました。

ステップ5「構想計画」は、はじめにテーマに即して「グループ・ディスカッション」をおこないます。やり方はステップ2「グループ・ディスカッション」の技法とほぼおなじですが、カードに記載する語尾は「〇〇〇する」とし、実際の行動（アクション）をイメージします。「探検ネット」（図解）を作成したら、そこから重要なカードを「多段ピックアップ」し、つ

ぎに「KJ法図解」を作成し、最後に「衆目評価」をおこないチームとしての合意を形成します。その結果を以下のように文章化しました。

（1）差別をなくす

カーストはあきらかに差別を生みだしています。差別をなくすために私たちは、行動しながら同時に不確かなことについては実態調査をおこなうといった「アクション・リサーチ」をおこないます。ネパールはあたらしい憲法を現在策定中ですから、その改正案のなかでカーストがどのようにあつかわれているかしらべます。ネパールの教育関係者および学生から教育現場におけるカーストの現状についてききます。カーストは衛生問題に大きくかかわって発生してきているので現地の医療関係者からも事情をききます。現地の声をききながら実践をすすめ、カーストによる差別の弊害に関する知識を普及したり、ひくいカーストの教師を学校で採用したりします。次代をになうわかい夫婦にも協力してもらいます。このように、現地の人々と協力して差別社会を改善していきます。

（2）今回の経験を今後に生かす

今回の山岳エコロジースクールで経験したことを大学のゼミやサークルで報告したりして、しっかり日本人につたえ、カーストについてまなんだことを他の人とシェアしていきます。そして、いつの日かあまりとよくない未来にサリジャ村にもう一度いき、村のカーストがその後どうなったかしっかりと見届けます。

（3）現地の人々とともにあゆむ

一方で、今後、海外に行くときには、その国の問題を事前にしらべて、実際に現場を見て感じるようにし

ます。日本にいる発展途上国の人々と交流し仲良くします。ネパール語も習得します。このように、途上国の人々との直接的なやりとりを通して実践的に学んでいきます。カースト内の偏見をただす教育にも協力します。このような過程では参画型アプローチを今後とも実践します。

上記に対して「衆目評価法」という評価法を適用下結果、これらの中でもっとも重視されたことは（３）
「**現地の人々とともにあゆむ**」になりました。

VI. 参加者の感想

混沌からの一歩

M. K.



初めのカトマンドゥは雨の冷たい夕闇だった。空港から外に出ると匂いが鼻をついた。

「あ、間違ってたなかった。来て良かった。」長い影法師を引いて道路を歩きながら僕はそう心につぶやいた。

今回のツアーに参加する前に、いろんな人（日本人）から「ネパールに行くとは故郷に帰ったみたいな気持ちになるよ」と言われることが多かった。「日本人とネパール人は遺伝子的に似ている部分が多い」という説

もあるそうだが、ネパールとはこれまで接点らしきものが殆どなかったせいか、僕にとって「とても遠い国」だった。いや、きっと接点はいくらでもあったのだろうが、僕の無知と無関心のせいで、不遜にも素通りした「地図上の一点」でしかなかったのだ。そんな国に目を据えるようになったのは、本当に小さな偶然からであった。

今年の三月に成り行きのような形で誘われた、ある医療ボランティア団体（AMD A）の会合に参加したことがきっかけである。その団体はネパールに母子のための病院を設立・運営しており、時々日本人の医療関係者が視察に行く。その場でちょうど視察から帰国したばかりの方の講演があり、ネパール - 日本間の衛生観念や死生観における文化的隔壁の話を初めて聞きながらも、不思議な国があるのだな、とぐらいにしか考えていなかった。その後、皆で食事に移動したのだが、僕が初回参加のため、ものめずらしいと思われたのか、その中のある人から病院費用を払えない現地の人のために何か事業を起こせないか、と相談された。向こうにすれば、話の接ぎ穂だったのかもしれない。が、僕には、一瞬にして目の前にとても奥深い世界が一気に広がったように感じられた。NPO、発展途上国での活動、ネパール、と全てが僕にとっては未知なはずなのに、僕はごく自然に吸い込まれていった。

それからはネパールのことを勉強したりNPOについて調べたりする毎日が続き、ネパールは僕の生活の一部になっていったが、それでもネパールに対する親近感が芽生えた、とは心底なかなか言い難かった。外から見るネパールは、混沌とした場所であり、極彩色もヒマラヤの厳しさも、すべて自分の住む国・日本とは異質に見えた。「本当にこんな国で、僕のつくろうとしている事業なんて意味があるのか。僕は第一この国の何を知り、何をしたいと思っているのだろう。僕が惹かれたものは、思い込みや逃避願望による幻想だったのだろうか。」活動をスタートさせるために奔走する一方、そう、自問自答を繰り返して不安になり、気持ち空転することもしばしばだった。その時、ヒマラヤ保全協会の現地研修会のことを知り、いろいろな自

分の思い込みを一掃するためにも、まず自分の目でネパールを見てみようと思いを決断した。

初めて見るネパールは、確かに写真の通りだった。保全協会の圧倒されるような衛生注意も尤もだった。だが、のどかな田園風景だけではなく、排気ガスとクラクションの叫びとプラスチックゴミまみれのカトマンドゥの大通りに響く喧噪にまで不思議と懐かしさと愛着を覚えた。ネパールに来る他の外国人も似たような気持ちになると聞いた。次第に遺伝子などは無関係で、これはネパールに存在する様々な多様性によって育まれた包容力によるものではないかと思いはじめた。

ネパールの2001年国勢調査では101のカースト・エスニック集団と92言語が報告されている。14万平方キロメートルという決して広いとは言えない国に、亜熱帯から氷雪帯まで存在することも併せて考えると、ネパールほど「多様」という言葉がぴったりの国は他に無いのではないか。この密度の濃い多様性に、毎年ヒマラヤを目指し世界中から集まる数多くの登山者・観光客や、出稼ぎや留学のために外国生活を経験したことのある国民が加わることで、ネパールの複雑系は肌理細かい包容力へと昇華していったのかも知れない。

本研修会のテーマである「ネパール・カーストの現状」も含め、この研修会を通して数多くのことを学んだが、やはり自分が漠然と抱いていた途上国に対する偏見が無くなったことが最大の収穫だと思う。僕は研修会に参加する前にネパールの歴史や文化を勉強し、自分なりにネパールが「どういう国」なのかある程度分かったつもりでいた。だが、短期間ではあったが実際にネパールを訪れ、カトマンドゥの裕福な実業家達の家を訪れ歓談したり、ベニの近くの非電化村で村人と生活を共にしたりするうちに、僕の中の「バーチャル・ネパール」は完全に消えてなくなった。ここには「非力で無知で教育の大切さを認識していない発展途上国の住民」はどこにもおらず、日本ではもうあまり見られない、満ち足りた清々しい表情をした誇り高い人々がいた。しなやかな強さを持つ、のびのびとした笑顔の子どもたちがいた。嬉しそうに自由を楽しむ動物たち（ペットではなく）がいた。勿論僕がこの研修会で知り合ったのはほんの一握りのネパール人で、彼らがすべてのネパール人を代表するとは思っていないが、途上国の問題点が誇張されてばかりで、先進国の僕たちはいつも「施す」ことを中心に奢って考えてしまい、彼らの豊かさ、そして彼らから教えてもらうことが沢山あることをついにがしろにしてしまう。ネパールにいと、彼らに学ぶことが多く、とても厳かなきもちになった。中でも子どもの学費のために出稼ぎに行っているアラブ首長国連邦から二年ぶりに一時帰国している同世代の若者と話したり、毎朝五時過ぎに起床して自宅と家畜小屋を丁寧に掃除する女性達の姿を見たり、ネパールの暮らしの一端を垣間見られたことは、そのような思いをより深く印象付ける大変貴重で嬉しい思い出となった。ヒマラヤ保全協会の研修会ならではの体験だったと思う。

また異文化に直に触れることにより「教育」「健康」「貧困」「幸福」等「普遍的」（世界中どこに行っても、基本的には同じようなもの）と思っていたものが、実は極めて「主観的」とであるという事実気付いたことも、自分にとって大きな収穫だった。いくら日本と違う国だからといって、教育や医療は普遍的だから途上国でも日本流に物事を進めても失敗は無いだろうという日本人は少なくないし、自分自身そう考えている節があった。だが、今回の旅でこのような自分の価値観に基づく漠然とした思い込みで視野狭窄に陥った状態での国際援助（無知なる善意）は現地の住民にとっては有難迷惑どころか、危険だということを痛感した。

首都でさえほぼ毎日停電がある、山村部では昼間でも読書ができないほど家の中が暗いなどネパールには取り組むべき課題は山積みである。また、日本とネパールには大きく異なる部分が多々存在し、外国人の自分には理解できないし、恐らく立ち入るべきでは無い領域も少なくない。しかし今回の研修会で特に印象に

残った山村部の過疎化、環境破壊、ポイ捨てゴミ等は僕たちが今、「地球人」として瀕している問題であり、これらの分野では日本の知見が生かせるという確かな手ごたえを感じた。これからはそれらの問題解決に取り組むことで、ネパールの発展に貢献したいと思う。

ネパールから帰ってきた今も、ここまで自分を駆り立てるものが何であるかはわかっていない。心の琴線に触れたとしかいいようがないのだ。ただ、保全協会の現地研修会で得た思いや考えは、ますます僕の確信を強くしてくれた。僕はネパールが好きだ。多様性も、混沌さも、強さも。そこから始めるのでいいと思う。この国の発展のため、僕が出逢った人たちのために何かできれば、と今、心底思う。この機会を与えてくださった保全協会の皆様、本当にありがとうございました。

必需品とは何だろう？

M. M.

世界最高峰のエベレストがあるのでネパールと言う国は良く耳にしたが、ネパールそのものについてはほとんど知らなかった。多分、今回ネパールに行くまではネパールの人に会う機会が無かったと思う。ネパールへのツアー参加が決まってからネパールについて調べ始めたが、GDPでは世界の貧困国の20位にランクされている事実を知った。エベレストに登る登山者が多いのになぜネパールが貧乏なのか理解できなかった。貧困と大きな係わり合いがあるのが犯罪である。窃盗やタクシードライバーが料金をごまかしたり、又物乞いもそのたぐいかもしれない。私はネパールでのマオイストの活動についても知っていた。今まで世界の数カ国を旅行してきたが、途上国に行くのは初めてだったので色々な不安もあった。しかし、実はこれが私がネパールを訪れる動機となった様な気がする。それはその国へ行って実際に見て、そして何か新しい経験をする事が出来るからである。実際に貧困を目の当たりにする事によって、私の人生観が変わる事を期待していたのである。そして貧しい人々の為に何か力に成ればとも考えていたのである。



車でホテルに向かう途中で貧困の様子を目の辺りにした。子供たちはぼろぼろの衣服を身にまとい、あるいはほとんど服を身にまとっていない状態だった。洋服の状態も汚くてだぶだぶなので、きっと何処からかもらってきたのではないかと思われた。それに人々がお金や食べ物をねだっている光景も見た。少年のグループはゴミ箱をあさって残り物を探していたが、その地域は河にそって建てられたスラム街の様であった。河の色も茶色で河岸の近くをゴミが流れていた。しかし、これらはここネパールではごく自然な光景なのだが、私はそれらの光景を見て別にショックも驚きもしなかった。後で考えてみると、その時、私は時差ぼけや寝不足のせいで感覚が麻痺していたのかもしれないし、ネパールに来る前にそれらの情報を予め知っていたせいかも知れない。私が訪れる予定のサリンジャ村は電気も無いと言う事だったので、カトマンズよりひどい所かも知れないと考えていた。

貧乏だから電気が無いのだろう、と言う先入観を持っていたのだが、実際に行ってみるとその考えは間違っていた。村人達は町の人々より楽しく生活を送っているように思えた。彼らは自給自足の生活をしている

のでお金はそんなに必要でないように見えた。そして広大な土地を持っているので、自分達の手で家を建て、薪が必要であれば、森からいくらでも持ってくる事が出来るし、野菜や果物も自分達の畑で作り、家畜も自分達で育てている。彼らは電気無しの生活でも快適に生活している様に見受けられた。だから村では電気は必需品と言うよりも贅沢品なのだろう、と言う印象を受けた。私の人生観はネパールを訪れてから確実に変わったが、それは予想していたほどでもなかった。私がネパールを訪れていた間に、私は一度も彼らの生活の様子を見て彼らが可哀そうだとは思わなかった。私が感じたのは、日本との生活とは又別な生き方をしているのだと感じた。違う文化の生活スタイルを比べてどちらが良いとは言えない気がした。今回の旅行は短期間ではあったが、間違いなく別な文化を知る良い機会だったし、もっと長い間滞在していたら更にどんな事が学べるだろうかと思った。しかし、同時に課題も与えられた。それは単に近代文化生活を彼らに押し付けるのではなく、彼ら独自の文化を破壊することなく、援助するにはどう言う方法を取ったら良いのかと言う事である。

ネパールに行ってよかった

H. R



ネパールに行ってよかった。私が山岳エコロジーツアーに参加した動機は、一つ目は、世界最高峰のエベレストがある国なので見に行きたかったという誰もあること、二つ目は、自分が途上国の問題に興味があるので、このツアーに参加すればネパールの深いところが見えるのではないと思ったから、そして最後に、僕は学生なのでその長いようで短い期間のうちにたくさんの国に行き、できるだけ深い経験を積みたいと思って

いるので私はこのツアーに参加することを決めました。

そして今回ツアーに参加して感じたこと。まず首都カトマンドゥの空気の汚さ。現地の人でもマスクや布で口を覆っていたほどで、その原因は車の排気ガスが主な原因だと感じた。特に大型バスから出る排気ガスはとても黒く、いかにも体に悪そうな煙が大量に出ていたのが分かったが、私はマスクを着け忘れていたのでとてもつらい思いをした。今度行く機会があったら必ず着用したい。そしてネパールではゴミがポイ捨てされている光景をよく見た。それはトレッキングした道中にもあり私はとても悲しい気持ちになった。木々や川、そして山などの自然豊かなネパールに捨てられたゴミがあちらこちらで目に入り、これらのものがなければネパールの自然はよりいっそう美しいものになると感じた。それにはゴミ処理施設の拡大と国民の意識の改善が必要であると考えた。落ちているゴミを拾う作業を嫌がる人々はたくさんいると思うし、それは私たちがテーマとした問題であるカーストについて関係があるかもしれない。だからこの問題はとても難しいと思うのだが、私はいつかネパールの自然にゴミがなくなってより美しい自然が見られるようになってほしいと考えました。

最後にネパールの人々の心の温かさ、ホームステイでお世話になったサカマニさん一家その家族に誰も英語を話せる人がいなかったのが正直焦りましたが、私をもてなそうとしてくれる気持ちがとても嬉しかった。一緒にお酒を飲み、言葉は分からないが自然と笑顔になれたし、楽しかった。一晩サカマニさんとは違う家で夕飯をご馳走になったのだが、夜遅くサカマニさんと一緒に帰ると多分普段は寝る時間だと思うのだが火をたいてダルバートを用意してくれた。お腹はいっぱいだったが気持ちが嬉しくて完食した。それとサリジャ村で知り合った22歳の学生には特に感謝といい出会いができた。彼とは今も連絡を取り合っている。カトマンドゥの彼のアパートにも泊めてもらったし、彼が働くレストランで少しおごってもらったりもした。私は断ったのだがあなたは友達だからと言われ本当にネパールの人々の心の温かさを感じた。

今回このツアーでたくさんのことを学べたし、感じる事ができた。これからこのことを周りの人々に話して興味を持ってもらえたら最高です。そしてまたいつかネパールに行くことに決めました。

VII. 写真



ポカラのレストランにて



ヒマラヤ保全協会ネパール事務所にて



サリジャ村へむけてトレッキングの途中（背後はベニ付近）



サリジャ村にて植樹をする



紙漉工場（ロクタ紙加工施設）の前にて
紙漉メンバーとともに



織物工場（イラクサ加工施設）の前にて
織物メンバーとともに



ホームステイ先のゴルジャ兄弟



スズメバチの巣（幼虫を食べる。クリーミーでおいしい）



苗畑管理人のシャカムニ=コルザさんご一家



サリジャ村の人々とミーティング



サリジャ村の商品の直売店（近隣の中核都市クスマにて）



ポカラへもどる途中（背後はフェア湖）

参考文献：川喜田二郎著『発想法』（中公新書）中央公論社，1967 年

第 17 回 山岳エコロジースクール 報告書

発行日 2009 年 11 月 3 日

発行者 特定非営利活動法人ヒマラヤ保全協会

〒151-0053 東京都渋谷区代々木 3-5-7 シグマロイヤルハイツ 403

E-mail: ihc.jpn@ybb.ne.jp TEL/FAX: 03-5350-8458 <http://www.ihc-japan.org/>